
ひぐらしのなく頃に 異端の刑事

チルノ・トレバー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひぐらしのなく頃に 異端の刑事

【Zコード】

Z9524Z

【作者名】

チルノ・トレバー

【あらすじ】

ある事件で独断で発砲し、武装犯を射殺した警部補・坂戸富時雨。新たに興宮に赴任した彼女の存在は、雛見沢の運命にどのような影響を及ぼすのか……

丸木銀行立て籠り事件（前書き）

また新しく書いてしまった……
だが後悔はしていない。

丸木銀行立て籠り事件

昭和53年 3月24日 午後4時26分 東京某所
数人の武装した男達が丸木銀行に押し入り、職員を人質に立て籠る事件が発生した。

これを聞いた警察は機動隊を出動、銀行を包囲し、説得を試みる。
そして付近の建物の屋上では、特殊銃隊が犯人に狙いを定めていた。

「射撃許可はまだか?」

屋上で寝そべり、スナイパーライフルを構えている女性が苛立ちながら、近くに居る部下に尋ねる。

「まだありません。どうやら本部は説得を試みるようですが

それを聞いて彼女、坂戸宮時雨は舌打ちする。
既に犯人を照準に捉えており、許可があればすぐにでも射撃可能の状態だつた。

今回立て籠つて居る男達はどれも凶悪犯で、今まで多くの命を奪つてきた。

そんな連中が相手なのだ、人質の一人や一人簡単に殺すだろう。

一刻も早く制圧しなければ、人質の命が危うかつた。にも関わらず、本部から射撃許可が降りない上に武装犯に説得を試みると、いつ。

その本部の危機感の無い対応が元々、それほど気が長い方ではない彼女を苛立させていた。

「撃たないでくださいよ？隊長」

「分かってらあ」

スコープを覗きながら、彼女はそう返事を返す。結局その後も射撃許可は降りず、本部による説得が続けられた。

それから約一時間が経つた。

時間が経つにつれて、武装犯達の顔から余裕が消え焦りが浮かんでくる。

説得にも耳を貸さなくなり、人質に暴力を振るうようになる。そして

「あの野郎……撃ちやがった！！」

時雨の顔が怒りに染まる。

遂に武装犯の一人が近くに座っていた警備員を撃つてしまった。

幸い、急所は外れていて命に別状はないが、このままでは人質の命は無いだろう。

「射撃許可はまだ出ないのか！！」

「駄目です、特殊銃隊は待機せよの一点張りのままです！！」

「この状況でまだ説得するつてのか？何処まで危機感がねえんだよ、本部は！！

おい、指揮を取つてるのは誰だ！！」

「太宰警部です」

「太宰いい！？あんのエロオヤジが！！」

時雨と機動隊を指揮している太宰長久警部は旧知の仲だった。最も友人と呼べるような穏やかな関係などではないのだが。

機動隊に配属されてから直ぐに太宰からセクハラされ、それに激怒した時雨が太宰を三ヶ月間入院するほどの大怪我を負わせていた。

その後、太宰の傷は完治するも、当然自分を病院送りにした時雨にいい印象があるわけがなく、事あるごとに時雨に無理難題を押し付けていた。

何時まで経つても射撃許可を降りないのは、時雨に手柄を取られるのが

気に入らない太宰の嫌がらせだろう。

それが分かっている時雨はさうに苛立ちは募つていき

「……もういい

怒りは頂点に達した。

「は？」

「撃つ

時雨は躊躇つたりなく弓を金を引いた

TIPS 報告書（前書き）

TIPS書いてみた。
次から興奮へ行きます。

丸木銀行立て籠り事件の報告書

概要

昭和53年 3月24日 午後4時26分

丸木銀行にて立て籠り事件が発生、太宰警部の指揮の元機動隊による包囲、説得が行われた。

だが、犯人は説得に応じず、人質の一人を銃撃し負傷させる。その後、特殊銃隊の小隊長である坂戸宮時雨警部補が独断で発砲、武装犯二名を射殺した。

その後、機動隊の突入により、残りの武装犯も全員逮捕される。

被害

機動隊 特に無し。

人質 警備員一人が銃撃により負傷、命に別状なし

武装犯 二名射殺、残りは全員逮捕。

坂戸宮警部補の処遇

事件解決後、坂戸宮警部補の身柄を確保、事情聴取を行う。

坂戸宮警部補は事情聴取で「あのままでは人質の命が危うかつたため、
「発砲した」と語っているが、太宰警部は他に何か意図があつたと
見ており、
更に追求する予定。

以上で報告を終わらせてもらいます。

3月25日 伊崎正人巡査部長

異動（前書き）

今回も短いぜ！

俺はバスに揺られながら資料に目を通していた。

武装犯を射殺した俺は事情聴取を受け、自宅謹慎を言い渡された。
そして数日後、俺は特殊銃隊を除隊され、

興富署へと異動を命じられた。

本来なら懲戒免職のはずの俺が、何故これほど軽い罰で済んだのか？

正直、今でも分かつてない。

だが、わざわざ罰を軽くしてくれたんだ。ありがたく異動させて
もらつことにして、

俺は直ぐに興富へ向かった。

『興富へ興富へお降りの方は』

アナウンスが興富へ到着したことを告げる。

回想に耽つている間に目的地に着いたようだ。

俺は資料をトランクに仕舞い、バスから降りる。

降りて直ぐに、愛用のジッポライターで口にくわえた煙草に
火をつけ、ゆっくりと煙を吐き出し、興富書へ向かつて歩きだし
た。

「本日付で興富署に異動になりました。坂戸富時雨です。」

俺は署長に異動の挨拶をしに来ていた。

「署長の川内です。噂には聞いてますよ。なんでも全日本都道府県警射撃大会で

一年連続で一位を取つたとか」

「まあ……はい」

「それに、君はその若さで特殊銃隊の小隊長を務めていたとも聞く。

いやあ～君のよつと優秀な人物が来てくれて、私は本当に嬉しいよ」

「はあ……」

その後も暫く署長に褒めちぎられ続け、

署長室から出る」とができたのはそれから一時間後のことだった

「やれやれ……」

よつやく署長室から出る」とができた俺は、近くのソファーにドッカリと座る。

そして胸ポケットから煙草箱を取り出し、煙草を吸おうとするが

……

「空っぽか……」

箱の中には一本も煙草は入っておらず、溜息をつきながら箱を握りつぶす。

取り敢えず煙草でも買いに行くかな。

そんなことを考えていると

「吸います？」

煙草箱を差し出された。

前を見るとそこには大柄な男が立っていた。

「それじゃ一本」

箱から一本抜き取り、口にくわえて火をつける。

それを見た大男は俺の隣に座り、同じように煙草を吸い始める。

暫しの間互いに無言で紫煙を燻らせる。

大男が話してきた。

「あなた、ここの人間じゃないですよね？
新しく来た人ですか？」

「ああ、本田付で興富署に異動になつた、坂戸富時雨だ。よろし

く

「こりや」「丁寧に。私はここで刑事やつてます。
大石蔵人です。気軽に藏ちゃんとでも呼んでください。
んつふつふつふ

「流石にそれは無理があるぞ……大石さんで勘弁してくれ。
ああ、俺のことは時雨でいいからな」

「もうですか。ではお葉巻に甘えしょうかねえ」

もう言つて大石さんは大きく煙を吐き出した。

TIPS 歓迎会（前書き）

次から暇潰し編に入るぜ！

「ここか？」

「ええそうです。さつ入りましょう」

俺の質問に大石さんはそう答え、中に入っていく。
これから歓迎会があると言つて、ここまで連れてこられたんだが
……

「雀荘じゃねえか……」

連れてこられたのは雀荘だった。

これから起きることが簡単に想像でき、溜息をつきながら
大石さんの後に続いた。

雀荘に入ると、中年の中年がこちらに向かって手を振った。
「藏ちゃんこつちこつちー！」

「なつはははは、サトさん久しぶりですー！」

大石さんが中年の中年と親しげに話し始める。

「それでその人？新しく入った人って

「ええ、今日こつちに来たばかりの

「初めてまして、坂戸宮時雨です」

「俺は佐藤、情報屋をやつてる。サトさんとでも呼んでくれ」

「じゃあ俺のことも時雨で」

「それじゃ時雨ちゃんも呼んでほんでもいい」

そう言ってサトさんは笑う。

それを見て、さつきもこんなやりとりをしたことを思い出し、笑みがこぼれた。

その後、ダム現場監督であるおやつさんが来て、四人で麻雀することになった。

俺を金づるにしていかがわしい店に行こうとしてるみたいだ。上等だ……俺を舐めたこと後悔させてやるよ。

「……時雨ちゃん？ あんた、何か雰囲気変わつてません？」

「氣のせいだ。……ああ、そつだ。もし俺が勝つたら、てめえらの財布が空になるまで酒呑つてもらおうか」

「いいですよ。最も勝てたらですけどね。んつふつふつふー」

「そこまで言つてことは自信があるんだろつな？」

「軽く終わらせて、バーーちゃんの所に行かせてもらおうかな

俺の言葉に三人は不敵な笑みを浮かべながら、
口々にそう語る。

自分の腕前に自信があるんだろう。
俺は彼らに向かって獰猛な笑べる。
そして

「わあて……始めよつじやねえか

俺のこの言葉で激闘の火蓋が切つて落とされた

「うくくしょおおおおおーーーー

「私、今月厳しいんですけどねえ……

「」いつ元プロ雀士とかじやねえだろうな？」

俺の目の前には無様に打ち拉がれる男が三人。
結果は俺の圧勝だった。

「わて……」

男共の方がビクリと震える。

……情けない連中だ。

「奢つてもらひやうつか？有り金全部で」

満面の笑みで死刑宣告を告げる。

俺の言葉を聞いた瞬間、男共の絶叫が木靈した。

その後、俺達はいろいろな店を周り、文字道理無一文になるまで男共に酒を奢らせ、俺は満足してホテルに帰つていつた。

興宮署到着（前書を）

暇潰しに入つたよ

昭和53年6月13日

犬飼建設大臣の孫、犬飼寿樹が何者かに誘拐されるという事件が発生した。

この事件は警視庁公安部しか知れておらず、公安部は全職員を招集、極秘に調査を開始する。

職員達が各方面に調査を始める中、新米刑事の赤坂衛は鬼ヶ淵死守同盟の調査を命じられる。

そして赤坂は県警本部からの紹介を受け、興宮署に来ていた。

「ここんな部屋で申し訳ありませんね。応接室を抑えてあつたんですけど、

突然議員が居らして追い出されてしまいまして」

そう言つて本田屋氏は笑う。

私達が今居るこの部屋は会議室とはとても呼べるものではなかつた。

着替えロッカーが並び、近くのソファーでは新聞紙で顔を隠し寝ている者も居る。

胸にかなり立派な膨らみがあるから、女性だらつ。だが、今はまだ勤務時間中のはずだ。

彼女はこんな場所で寝ていいのだろうか？

「ああ、またか……時雨ちゃん、時雨ひちゃん……！」

本田屋氏が寝ている人物を揺すって起しそうとする。

「う……ん……」

だが女性はわずかに唸つただけだった。

「時雨ちゃん起きなつて！こんなとこひで寝てると、またシゲちゃんにどやられるよ……！」

「……分かった、起きるよ」

本田屋氏の言葉に女性は渋々体を起します。

「それでこいつ誰？新入り？」

「……警視庁から来ました、赤坂衛です。

鬼ヶ淵死守同盟について調査するためここへ訪れました

いきなりこいつ呼ばわりされ、少しムツとするもそれを抑えて自己紹介を行つ。

「警視庁……ねえ」

そう言つながら、女性はひかりを探るよつひかりを見つめる。

「そこまでこじつおきなつて……ああ、紹介がまだでしたね。彼

女は

坂戸宮時雨ちゃん。こいに勤めている刑事です」

「坂戸富時雨……？確かに、全日本都道府県警射撃大会で一年連続で一位を取った機動隊員の方ですよね？」

「正確には警視庁第六機動隊所属、特殊銃隊第一小隊小隊長だけどな」

彼女は囁んでしまった。自分の所属を、ことみなさげに言い切る。

「まあ最も今はただの刑事なんだがな」

そう言つて彼女は肩をすくめる。

そう言えば、彼女は確かに将来を嘱望されていたはず。その彼女が何故このような田舎町に居るのだろうか？そこまで考えてある事件を思い出す。

“丸木銀行立て籠り事件”

武装した数人の男達が銀行に押し入り、職員達を人質に立て籠つた事件だ。

一時は膠着状態に陥つたが、犯人が人質に向かつて発砲したことにより

事態は急展開を迎える。

人質の命が危険だと感じた一人の機動隊員が独断で発砲し、犯人の内二人を射殺した。

それに合わせて機動隊が突入、残りの犯人も確保されて事件は幕を閉じた。

もしかして彼女がそうなのか？

「さて、話の邪魔になりそうだから俺はそろそろ

失礼するよ

本田屋氏と話していた坂戸富氏が立ち上がり、会議室から退出する。

「おつと

だが、直ぐによろけて壁に手をつぶ。
よく見れば顔色が悪い、何か病を患っているのだろうか？

「時雨ちゃん、なんだか調子悪そうだね？
風邪かい？」

「いや……单なる一時酔いだ

「へえ……時雨ちゃんが一時酔いになるの始めて見るよ」

「何時もはならないんだがな。……チツ、何か悪いこと起きなきやいいんだが……」

坂戸富氏はふらつく足取りで会議室から出ていった。

その後、本田屋氏から鬼ヶ淵死守同盟の簡単な説明を受けたが、私は先程の言葉が何故か頭から離れなかつた

雑見沢案内（前書き）

何時までこのペースで投稿できるか？

「時雨ちゃん。ちょっといいですか？」

自分のデスクに突っ伏し、眠っていた俺は大石さんの声で目を覚ます。

それと同時に頭が痛み、顔を齧める。

「……何だよ」

「おやあ？ 顔色がよくないですねえ。風邪ですか？」

「それ、さっき本田屋さんにも言われたぞ。……」「口酔いなんてならない人だと思つてましたよ」

「あんたは俺をなんだと思つてるんだ？
俺だつて酒に酔つ」とぐらこはあるぞ

「私たち三人の有り金全部酒代にして、
一夜で店の酒全部飲み尽くしたあなたが言つたところで
全く説得力ありませんよ。んつふつふつ

「あのな……そもそもあれば、あんたらが俺に負けたからだうつ
が！」

そうして何時ものよつに話していると、先程の刑事……赤坂が呆気に取られた表情で、じからを見ていることに気がついた。

「それで、結局無駄話をしこきたのか？」

「あーっと用件をすっかり忘れてました。
赤坂さんちよつといつちに来てもらえます？」

大石さんに呼ばれ、赤坂がやつて來た。

「どうも坂口富士さんさつきふりですね」

赤坂は軽く頭を下げる。

「おやあ知り合いでですか？」

「まあ少しな」

「そうですか……まあちよつどいいかもせんね」

「一度良い？」

大石さんの言葉に首をかしげる。
赤坂にも関係あることなのか？

「実はこれから彼に雑見沢を案内してあげよつと思いまして。
時雨ちゃんにも同行して欲しいんですよ」

「勘弁してくれよ……本当は今直ぐにでも早退したいんだぜ？」

実際今でも頭痛と吐き気でかなり辛い。
出来れば乗り物なんかには乗りたくない。

「そこを何とか、お願いできませんかねえ。
今度一杯奢りますから」

「はあ……分かったよ。その代わり案内は大石さんがしてくれよ。
俺は座席に座つてるだけだからな」

「ええ、それで構いません。では行きましょう」

俺達は雛見沢に行くため、車に向かつた。

今俺達は雛見沢に向かつて車を走らせている。
大石さんが運転し、助手席には赤坂が座り、
後部座席には俺が座つていた。
突然だが、問題が俺に起きていた。
雛見沢へと続く道路は途中から舗装されていない砂利道へと切り
替わる。
当然車の揺れは大きくなる。
つまり……

「ぎもぢわるい～」

車の揺れが俺の二日酔いをさらに悪化をせっていた。

「坂戸富さん大丈夫ですか？」

「無理……吐く……」

心配そうに俺に声を掛けてくれた赤坂にそう声を返した瞬間、車が急停止し俺は助手席に額をぶつける。

「あつちやー参つたな……」

大石さんがクラクションを鳴らす。

「あんた達、駄目だよこんなとこひで道塞いじやー！」

ぶつけた額をさすりながら前を見ると人相の悪い男達がバリケードを作り、道を塞いでいた。

「いじつら……赤坂、これで顔隠しとけ」

赤坂に野球帽とマスクとサングラスを投げ渡す。

「急にどうしたんですか？」

「いいから早くしや」

俺に促されて、赤坂は素顔を隠す。

この男達は園崎組の構成員で鬼ヶ淵死守同盟の過激派である。バリケードで道を塞いでいるのは、山へ不法投棄をしに来るトラックを離見沢に入れないと語っているが、実際はダム工事で使う重機に対する嫌がらせのためであり、山へ不法投棄は住民自らが行なつていていた。だつた。

(「ひつかせただでやられ」田酔いでいらっしゃるかの……)

大石さんが退くよつて定すが、男達達は一向に退く気配がない。

「おー

「へつへつわつー？」

何時までも動かない男達に苛立つた俺は、近くに居た男の胸倉を掴み、互いの鼻がぶつかりそうになるぐらいまで引き寄せる。

「ひとつと道開けやがれ……それとも全員しょっぴかれてえか？」

「わつわかりましたよ、今道開けますからーー！」

俺に凄まれた男は顔を真つ青にして、道を開けるように指示する。バリケードは退けられ車は奥に進む。

「時雨ちゃん。今回はずいぶんと荒っぽいですねえ。

どうしたんです？ 何時もはもつと穩便に済すじやありませんか」

「ほんとうに田酔いでただでさえいらっしゃるつての、元バリケード何かで道塞ぎやがつたから余計に腹が立つちまつただけだ。

……本当なら全員ボコボコにした

拳句、車で署まで引きずつていきてえくらいなんだぞ？ それをアレで済ましてやつたんだ。 むしろ感謝しやがれってんだ

「なつはつはつは！怖いですねえ～
あなたが同僚でよかつたですよ」

俺の言葉に暫しの間、大石さんが愉快そうに笑い続けた。

その後俺達は御三家である公由・古手・園崎の本家を案内し、赤坂の本当の目的である犬飼建設大臣の孫、犬飼寿樹の捜索の協力を約束して解散となつた。だが赤坂が先走り、無茶しないかが気になつた。

雀荘にて（前書き）

そろそろ小此木の出番だ！！

「」

赤坂に雑見沢を案内した次の日。

非番だった俺は自宅で銃の整備をしていた。
銃器マニアである俺の家には様々な銃器が揃つてあり、
非番の日には銃の整備をして一日を過ごすことが多かった。
上機嫌で銃を磨いていると、電話の「コール」が鳴った。

「はい、もしもし」

至福の時を邪魔されたことにより若干腹が立つたが、
待たせるわけにもいかないから電話に出る。

『時雨ちゃんですか? どうも大石です』

「大石さん? 珍しい家に電話してくるなんて」

『おや、そうでしたか? それじゃこれからは
毎日電話させてもらいますよ。んつふつふつふつ!』

「いや、流石にそれは遠慮する

『なつはつはつは! それは残念です』

その後、雀荘に来ててくれと言われ
俺は私服に着替え雀荘に向かった。

「あれ、おやつさん今日は早いですね？」

「おう、時雨か。今日は早くに片付いてな、特に用事もなかつたからそのままここに来たんだよ」

俺が雀荘を訪れると、既におやつさんが来ていた。

「吸います？」

おやつさんに煙草箱を差し出す。

「お、悪いな！」

おやつさんは笑顔で煙草箱から一本抜き取り、煙草を吸い始める。

「現場の方はどうです？」

「毎日毎日ダム工事反対だのいわれるわ、お絆呂えられるわ……たくつ頭がおかしくなつちまいそうだぜ」

おやつさんは苦々しい表情で煙を吐く。

ダム現場事務所に対する妨害行動はかなり苛烈な物だつた。初期の方は事務所に対する投石や重機破壊等直接的な物だつたが、警備を厳重にしたことにより、拡声器でダム反対を叫んだり、大音量でお絆呂えるなど間接的な物に変わつた。

おかげで事務所の近くを通るとあまりの大音量で耳栓をつけても耳がおかしくなりそうになる。

「……すいません」

俺は申し訳なさに頭を下げる。

「なんでお前が謝るんだよ？」

「本当なら村人の行動は、俺達が取り締まわなければならぬんです。
それなのに……」

俺が密かに悩んでいたことだった。

警察は一般市民の味方……なんて言われてはいるが、
実際は法律だの何だと味方することができる人々は
かなり限られるし、最も優先されるのは政治家だった。
ましてや相手は味方すべき市民だ。

普段は仕事だからと自分を正当化し、彼等を取り締まる。
だが一人になると、どうしても考えてしまうのだ。

俺がやっていることは正しいことではないのではないか？

「仕方ねえだろ、お前らが悪いわけじゃない。

蔵人も言つてただろ？警察には強いところと弱いところがあるつ
てな」

「……」

「そう氣負うなよ。お前は自分のできることを精一杯やって、
そのやつたことを誇ればいい」

「……はい」

「それに、お前がそんなにしおりじくなると鳥肌が立つちまつ」

「なつーおやつさんーー！」

おやつさんが声を上げて笑う。
最初は膨れていた俺もつられて笑つてしまつ。
俺が悩んでいたことは大したことじやないのかもしれない。
おやつさんが笑い飛ばしてくれたおかげで、
少しだけ気が楽になつた。

その後サトさんが酒を持つて現れ、三人で一杯やつていると、
大石さんが赤坂を連れて現れた。

「遅くなつてすいません。赤坂さんがお寝坊しちやいまして。
んつふつふつふ～」

「遅いぜ大石さん。じつはもう始めひまつてゐるよ

俺はビール缶を掲げて笑う。

「坂戸富さん勤務中に飲酒などしては……」

「ま～ま～！細かいことは気にすんなよ。
ほれ、じつち来いーー！」

「そうやう！パーと行こうぜ、パーつと……」

「蔵人も坊主も早くこちに来い！一緒に一杯野郎じゃねえか、なあ？」

「「「アツハツハツハ！」」「

三人で上機嫌に笑う。

俺を奢めようとした赤坂は、完全に出来上がっている俺達を見て言葉を失つたのかそれ以上何も言つことは無かつた。

大石さん達を交えて軽く一杯やつた後、

おやつさんが麻雀をやろうと言い始めた。

それ聞いた瞬間、大石さんが黒い笑みを浮かべる。

……どうやら、赤坂を食物にしていかがわしい店に行こうとしてるみたいだ。

事前に他の二人にも伝えてあつたらしく、おやつさん達も

それぞれ後のことを考えてだらしなく顔を緩ませていた。

赤坂は周りの変化についていけないのか、不安そうな表情をしている。

だが僅かに口元が歪んでいた。

結果が見えた俺は、酒を買つてくる

大石さんに言つて雀荘から出る。

空を見上げると、月が地面を照らしていた。

「あの勝負、赤坂の勝ちだな」

俺は忍び笑いしながら、酒を買ひに向かう。

その後、酒を買って帰ると中年三人組がうなだれ、

赤坂がどこかスッキリした顔を浮かべていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9524z/>

ひぐらしのなく頃に 異端の刑事

2012年1月8日20時53分発行